

「中銀カプセルタワービル」問題



西村 幸夫

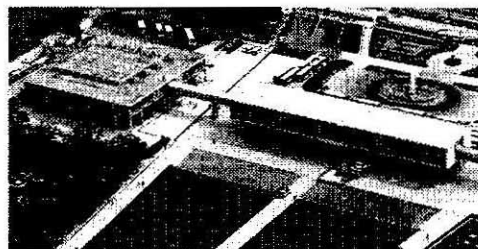
このところ近代の建築や土木の遺産をどのように評価するかという古くて新しい問題に直面する場面がふたたび多くなってきた。ひとつは今年4月に文化審議会が2棟の戦後建築を初めて重要文化財に指定するよう答申したという話題である。広島の世界平和

記念聖堂(1954年献堂、村野藤吾設計)と広島平和記念資料館(1955年開館、丹下健三設計)である。戦後の日本建築界の水準を示すものとして国際的な評価を得た作品がようやく国の文化財保護の対象となったのである。

他方、このところの好調な経済のせい、大都市を中心に再開発がさかんにおこなわれるようになり、近代の名だたる文化遺産が取り壊しの危機に瀕するようになってきた。たとえば、東京・大阪両駅前

局(1931年竣工、吉田鉄郎設計)および大阪中央郵便局(1939年竣工、同)に再開発の危機が迫っており、日本建築学会などが保存の要望書を出している。震災復興公園として唯一往事の面影を留める東京都文京区の元町公園は地元区の体育館再開発用地として風前の灯火の状況にある。

戦後建築では、日本発の独創的な建築思想メタボリズムの初めての本格的実作として知られている東京都中央区の



戦後建築物として初めて重文指定された広島平和記念資料館

近代文化遺産の破壊が進行しつつある。こうした矛盾した

原爆ドームへの視線を強調することに成功した全体配置の妙にある。この案が構想されたとき原爆ドームはモニメントとして万人に認知されていたわけではない。原爆ドームを焦点に据えた平和記念公園全体の構成が原爆ドームの記念性を高めることになった。それを支えたデザインのひとつにドームまで視線が抜ける広島平和記念資料館のピロティがある。そのピロティは鉄筋コンクリートの建築技術によって可能となったもの

近代遺産に新しい評価軸を

中銀カプセルタワー(1972年竣工、黒川紀章設計)がやはり再開発計画に揺れている。10平米という限界設計の各住戸ユニットが階段やエレベータから成るコアにポルト

で取り付けられており、ユニットごとに置き換え可能であるという新陳代謝の建築理論が体現されたものだ。だから再開発によって建物全体を取り壊すということはおおむとの建築理論そのものを全否定することを意味する。

戦後建築が文化財指定されたこの時期に、数多くの

現実の中で、私たちは歴史的建造物を意匠や形態の美しさや記念性だけでなく、それら建造物の持つ技術的・思想的な意義をより幅広く評価する視点を持たなければならぬ

中銀カプセルタワーの場合も、住戸ユニットの取り替えを可能とする建築工法がこの独創的な建築計画を生み出すものとなった。

戦後建築が文化財指定されたこの時期に、数多くの

中銀カプセルタワーの場合も、住戸ユニットの取り替えを可能とする建築工法がこの独創的な建築計画を生み出すものとなった。

技術の進展が新しい思想に形を与え、新しい思想は技術をさらに一歩前進させる。そうした進歩の道標となる建造物は文化遺産として保存に値する。近代の文化財にはこうした新しい評価軸が不可欠になってきている。

たとえば、広島平和記念資料館が後世に残るのは、形態の美しさもさることながら、

授、都市工学)